



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



第26回 (通算62回) 通常総会開催

江本 大輝

3月28日(土)日口交流協会の第26回(通算第62回)通常総会が開催されました(新橋生涯学習センター)。出席者17名、書面表決27名、表決委任者61名であり、計105名で、正会員数158名の定足数3分の1以上を満たして開催する事ができました。一年間の活動へご参加、ご尽力いただいた皆様、大変お疲れさまでした。またご協力をいただき有り難うございました。



総会においては、第1号議案では2025年度事業報告として年間の活動結果を概観し、第2号議案では2025年度の会計報告を行いそれぞれ承認されました。

2025年度は当協会の60周年を迎える佳節であり、2月には創立60周年記念パーティーを在日ロシア大使館で盛大に開催することができました(参加者約200名)。各部会の活動、催事も昨年とほぼ同様に企画、開催されました。NPOとして活動する当協会の収支は毎年赤字になりがちなのですが、皆様のご協力あって2025年度について年間収支はどうか黒字という結果には一安心でした。

また監査報告でも述べられたように、協会の会計財産として、かつての大道寺会長による寄付基金が「みちのく基金」という形で協会の支えにもなっています。会員数は年度末で、2024年度末とほぼ同じ161名となっています。第3号議案、4号議案で2026年度の事業計画および予算計画が報告され承認されました。この議案書にも挙げられている点を含めて、今年度も改善、新たな取り組みなど、検

討、予定されています。昨年末に事務所の複合機を新調し、毎月のリース料が新たに発生するなど、今年後の収支は予断できない面もあります。第5号議案では、2026年度の理事・監事を選任し、新理事(柴田様)も加わって承認された次第です。一般的に4月を迎え、新しい方々の活躍、参加もあると協会も元気が出てくるものと思います。

協会活動はボランティア活動が基本でありながら、一定の規模、継続性と、事務所を維持しながら最低限の収益性を確保するという事で、それほど簡単な事ではないとあらためて感じます。これまでの先人の取り組みをベースにしながら、また新しい事にも取り組み発展させていくことが求められています。

総会終了後に、短時間で第一回理事会を開催し、新役付き役員を互選。新たに顧問(江守様)、副会長(須田様)が選任されました。

総会、第一回理事会終了後、懇親会が新橋亭で開催されました。13名の参加となり、円卓を囲んでの歓談、今年の活動への抱負など意見を交換することができ、貴重な交流の場とすることができました。

最後にこのようなタイミングでの訃報となってしまい大変残念ですが、当協会の服部前会長がこの総会の翌日に逝去されました。永年にわたる協会活動へのご貢献、近年の難局にあっては60周年の佳節を迎える協会の舵取りをされ、総会直前まで様々ご指導いただきました。厚く感謝申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り致します。

お知らせ

●ロシア語教室生徒募集中!

レベル別クラスを経験豊富なロシア人教師陣が担当いたします。プライベート、オンラインレッスンもあり見学も1回可能です。

定期的ロシア語教室をご希望の方はご入会いただいておりますので、ご了承ください。

●ロシア民謡を楽しむ会会員募集中!

アルト、バスの方が不足しております。ロシア人ピアニストの先生の指導のもと、楽しく歌いませんか。ロシア語も覚えられます。練習日時などはホームページもご参照ください。

●ロシア語の泉 (17)

日時: 2026年4月19日, 5月10日, 6月21日(日) 13:30~16:00

授業料: 会員7,000円、一般8,500円

場所: 原則、協会事務局

*お申込み、お問い合わせ等はメール、FAXでお願いいたします。

NPO日口交流協会事務局

Fax:03-5563-0752 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。

振込先:郵便口座 00160-9-66486、加入者:日口交流協会
連絡先:日口交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org



追悼

3月29日、長年交流協会を支えてきた服部文男会長が急逝された。あまりに突然のことで衝撃で言葉も出なかった。

服部会長は交流協会に入会して30年以上、2020年からは会長として努めて来られた。バス旅行などの計画を立てては自ら車で現地を下見、副会長時代には内堀専務（当時）と二人三脚で活動を支えた。交流団にも団長として参加し、役員たちにも様々な活動に積極的に顔を出すように鼓舞するなど、実践的な会長だった。そして、昨年にはロシア大使館での交流協会60周年記念パーティーを実現させた。

協会の全体を把握して事務所を支えていた奥園さんによると、「お昼においでになるときは、必ずご馳走してくれたり事務所を居心地の良い場所にしようと気を遣ってくれたり、なんでも「まめ」で、人に頼むより自分で手配して動いた方でした。本当に頼りになる方を失ってしまいました。」

誰にでも気さくに耳を傾け、政治、外交などに左右されることなく草の根の民間交流を大切にという、協会の姿を真に理解し心を砕いていた方だった。それ故、訃報に接し、各地から追悼の辞が寄せられたのも頷ける。国内では、ロシア文化フェスティバル、日本・ロシア協会、対外文化協会、在日ロシア大使館、キルギス大使館。海外からは露日協会（モスクワ）、ウラル露日協会（エカテリンブルグ）、露日協会ペテルブルグ支部、露日協会アルタイ支部、タタル日本文化情報センター（カザン市）、友好クラブ「兼六園」（イルクーツク）、東方文化情報センター「ラクーダ」（チェリャビンスク）、露日協会ワニノ支部、友好協会「スズラン」（ハバロフスク）、露日協会ドゥブナ地域支部、露日協会サラトフ支部から届いている。以下、露日協会より、「日ロ交流協会会長服部文男氏の逝去を深く悲しみ、会員および役員を代表して、服部氏のご家族、ご親族、同僚の皆様にご心よりお悔やみを申し上げます。

私たちは皆、服部氏がその活動を通じ、私たちの協会と二国間の友情発展に多大な貢献をされたこと、そして世界が困難な時期を迎えている現状にあってもその活動に生涯を捧げられたことに対し、無限の感謝の意を表します。服部氏が友情のために積極的に関与された最も顕著な例は、長年にわたり日本とロシアの民衆を結びつけてきた文化・人道交流の発展です。私たちは、服部氏の事業が彼の後継者の中で生き続けると確信しており、「草の根」や「心から心へ」の外交が、両国の市民団体や熱心な活動家、服部氏を含む多くの人々の長年にわたる献身的な努力によって可能となった貴重な成果を守り、取り戻すのに役立つと信じています。

再度、私たちの喪失の悲しみを表明し、服部文男様のご家族や親しい方々、そして交流協会のすべての会員に慰めの言葉をお伝えさせていただきます。私たちは、国際的な対話の強化や文化・人道的交流の発展に彼が果たした計り知れない貢献を深く評価しています。服部文男様の明るい記憶は、彼を知り、ともに仕事をする栄誉にあずかった者の心に永遠に残るでしょう。共に哀悼の意を表します。敬意と哀悼の意を込めて。

露日協会 会長 Γ. B. ドウトキナ

露日協会中央委員会 委員長 M. A. キリチェンコ

露日協会書記長 E. N. クルチナ

中央理事会メンバー、ウェブサイト管理者 O. I. カザコフ

今年、私たちは大きな悲しみの連鎖を乗り越えなければならぬ。3月21日夜、病氣療養中だった山岸ひさ子様が亡くなりました。山岸様は交流協会では50年近く活動され、常任理事として30年にわたって古流（松藤会）生け花をロシア大使館及び通商代表部で教えて来られた。4年前に亡くなられた坂本妻子様と共に、毎月3回、花束を抱えて通い、古流の展示会にも毎年、大勢招待してお家元と案内されていた姿を思い出す。

チョウザメの養殖を手掛けていた会社の社長秘書として若い時から働いていた山岸様は、常に物静かで口数が少ないが、肝心なときにはすぐに動いてくれた心強い味方だった。凛として、いつも品の良いおしゃれをしていて、他の文化活動にも可能な限り出て必要な手助けを買って出てくれた。

真にボランティア精神をもって、交流協会を愛して活動してきた人を続けて失ってしまった。一つの時代が終わったような大きな喪失感が拭えない。元在日ロシア大使夫人を含め、ロシアから大勢のお弟子さんたちからの弔意文が届いている。

「ロシア連邦から多くの教え子一同は、わが国の永年の友人であり、日ロ交流協会の最年長会員であられた山岸ひさ子様のご逝去の報に接し、深い悲しみに包まれております。

山岸様は素晴らしいお人柄と高い専門性を兼ね備えた教育者でいらっしゃいました。そのお人柄、才能、そして美に対する深い感性は多くの教え子の心に深く刻まれております。山岸様は30年以上にわたり、大使館及び通商代表部職員のための生け花教室をご指導くださいました。この芸術の奥深さを教えてくださるとともに、異文化交流の発展に多大なるご貢献をされました。そのあたたかなお心、尽きることのないエネルギー、そして、前向きな姿勢により私たちの学びの時間は常に実り多く、有意義で心温まるものでした。ここに謹んで山岸様のご家族、ご親族並びにご友人の皆様にご心より深い哀悼の意を表します。」

山岸様の葬儀の日には満開の桜が見送っていた。

合掌。

（千葉麻里）

～新刊紹介～

ロシア革命の歩き方 ベトログラード・ガイドブック
太田就士著 パブリブ発行 2800円＋税

驚くべきガイドブックが3月に刊行された。内容は写真（著者撮影）・発生出来事・住所を掲載しながらサンクトペテルブルグに遺る共産主義革命の160の史跡を巡る内容。A5判215頁。「芸術の都」としての美しさだけでなく、「革命の都」としてのサンクトペテルブルクを歩くためのガイドブックである。ロシア革命の知識がない人にも理解しやすいよう、当時の時代背景が丁寧に描かれている。著者いわく「ロシア革命に関わる場所のみに焦点を当てて執筆された書籍は、他に存在しないだろう」。「エルミタージュ美術館の館内」「戦時下ロシアの渡航方法」「帝政を腐敗に導いた男、ラスプーチン」「革命を目撃した日本人・芦田均」「ロシアのフェミニストと女性の社会進出」「世界初の女性閣僚コロンタイ」などのコラムが興味深い。著者太田就士氏は慶応大学在学中にロシアの文化・歴史に魅了されてサンクトペテルブルク国立大学に留学。その後ソフトウェア開発のエンジニアとして活躍中。（山田雄康）

墓石から考える函館のロシア人墓地

倉田 有佳

函館の外国人墓地は、市の西端、山背泊と呼ばれる函館湾入口を見下ろす高台に位置する。ここが正式に墓地として認められたのは1870年のことだが、1854年に来函したアメリカのペリー艦隊に乗船していた二人の水兵が亡くなった際の埋葬場所として提供されたのが始まりである。

ロシア人墓地の墓石の数は、1975年に函館出身の馬場脩が自身の調査結果をまとめた『函館外人墓地』（図書裡会）に依拠し、「43基が現存」、が定説となっている。だが、1975年以降に3基が建てられ、墓と判明した1基（写真中央の大木の右側の白い建造物）があるため、「47基が現存」に改める必要がある。

その内訳は、ロシア海軍関係者（25）、サンドウイッチ群島出身の捕鯨船水夫（1）、領事館関係者（3）、明治初年に亡くなった日本人信徒（8）、白系ロシア人（8）、1989年に札幌で亡くなったロシア人信徒とその息子（2）で、1859年6月に亡くなったアスコリド号の水兵（ポーランド人）が最初の埋葬者である。日本人と結婚した白系ロシア人女性は、「ハリストス正教会墓地」（1875年認可。主として日本人信徒を埋葬）に夫と共に眠る。

墓石がない埋葬者もいる。現時点で確認できるのは、1911年から1928年の間に埋葬された20名で、死因は病死13件（肺炎、感冒、結核、胃癌等）、事故死3件（泥酔による海への転落・溺死、上陸後の殺傷沙汰等）などと



なっている。埋葬時期が10月中旬から11月に多いのは、カムチャツカ方面の漁場から漁獲物や生産物を積んだ船に乗った季節労働者が、ウラジオストクに戻る途中に寄港した函館で亡くなるケースが多かったためである。墓地での葬儀は函館ハリストス正教会の司祭が執り行ったが、漁夫の場合は雇用主のデンビー商会やリューリ商会が葬儀の経費を負担した可能性が高い。木の十字架（墓標）は建てられたに違いないが、海からの潮風を受け、冬場は雪に埋もれ、5年から10年のうちに朽ち果てたのだろう。

幕末開港期に亡くなった海軍関係者の墓石は、息子の死を悼んだ母親がウラジオストクから運んできたと言われる巨石を除き、同じ大きさのカマボコ型で、入口から右手に整然と並んでいる。これは、在函館領事館付武官パーヴェル・コステレフ海軍大尉が在任中に土盛りの墓に墓石を置く労をとったおかげである（沢田和彦『日露交流都市物語』成文社、2014年、64頁）。

70名近くが眠る中、筆者が知る2001年以降に親族が訪れた墓は、白系ロシア人（3）と日本人信徒（1）の4基に過ぎない。そのかわり、立入の許可を得た見学者が、墓碑銘を見ながら異郷に遺された人たちに思いを馳せる。

函館日口交流史研究会では2025年度事業として、拙稿

（「函館ロシア人墓地—墓碑のないロシア人をめぐって」『函館日口交流史研究会会報』No. 39（2018年））でまとめた20名のリストを露訳し、ホームページにアップした。これを手掛かりに、いつの日か子孫が墓参に訪れることを願いつつ。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）



3月1日の日本の家庭料理講習会に参加して

前田 真里

いつも日口交流協会さん主催の、お料理教室の開催を楽しみにしております。今回のお料理は日本料理でした。

私は日本人ですが、なかなか日本料理を作らないため日本料理のバリエーションや作り方をほとんど忘れてしています。ですから、日本料理教室もとても楽しみにしております。（子どもの頃の方が、母や祖母と一緒に日本料理を作っていました）。

この日のメニューは、「海苔巻き」「たまご巾着」「けんちん汁」です。私自身、どれも初めて作るお料理だったので、とてもワクワクしました。日本料理教室は、日本人なのに自国のお料理を知らない、作れない...、そんな自分が成長できる貴重な機会です！

そして、日本料理教室の時にはロシア人の方の参加者も多いので、お料理以外に国際交流の機会が増えて、それも楽しさの一つです。今回はアンナさんとオリガさんにお料理の時に使うロ



シア語を教えてくださいました。次回参加するときには、お料理で使うロシア語を予習していきます！

ロシアの方々日本の料理に興味をもって下さって、楽しそうに、そして一生懸命お料理されている姿を見るのはとても嬉しいものです。私の参加していたお料理テーブルでは、アンナさんのご主人のウラジミールさんがシェフのように腕を振るってくれました！素晴らしかったです！

私のシベリア育ちのロシア人男友達、「男は一人で何でもできないといけないって育てられた」「料理もできる」と言っていたのを思い出して、ロシア人男性最高！と思いながら、ウラジミールさんの料理の腕を眺めていました。

今回は4月に行われるキルギスのお料理教室に参加させていただきます。お料理を通じた国際交流は、心もお腹も楽しさで満たされます。今後ともお料理教室の開催を楽しみにしております！

クール！レニングラード 連載№2 「ブルコヴォ空港の地下トンネル」

おさむ
宮川 琢

ソ連末期のレニングラードで見たクールなものシリーズ第2弾です。

ブルコヴォ空港は、ソ連時代の留学の時に初めて降り立ってから、何度利用しただろうか？言わずもがな、今のサンクトペテルブルクの玄関口である。留学時は到着2日後に、留学生全員で引越荷物をトラックで取りに行った場所だ。朝9時に全員が今は運用していないブルコヴォ-1空港（1951年開港のターミナルで、1990年当時は国際便ターミナルとして使用されていた）の隣の倉庫ビルに行って通関したのだが、15人分の通関を終えて寮に戻ったのは夜の8時だったのを思い出す。

当時は学生身分だったので、ソ連国内の航空券はルーブルで購入出来た。当時のレートで換算するとレニングラード空港からモスクワ・シェレメチェヴォ空港まで片道100円程度だったので、東京の地下鉄1区間の切符代より安かった。行列を並ばないソ連の方々のチェックイン時の混乱をヨソに私たちはたったの100円しか払わない不良外国人のくせして、外国人専用カウンターでチェックインさせてもらっていた。その場合、飛行機のタラップ近くまでターミナルビルから外国人用バスで行くのが通常だった。ある時ロシア人の友人と一緒にだったので、試しに一般カウンターでチェックインしてみた。そこで初めて歩いたのが、飛行機に搭乗するのに一番近いサテライトビルまで行く地下道だった。動いてはいな

かったが、この地下道に敷かれていたのは紛れもないムービングウォークではないか！当時の日本では大阪の阪急梅田駅ぐらいでしかお目にかかれない設備だった。白い壁のトンネルにムービングウォークで進んで行く。これはもしかして、パリのシャルルドゴール空港ターミナル1のトンネルと同じコンセプトだ。当時の私はこの近未来のトンネルの存在に驚かざるをえなかった。

その後、外国人チェックインカウンターは廃止となり、ムービングウォークの部品が出回るようになったのか、サンクトペテルブルクに行くたびに晴れてこの洒落たトンネルを使わせてもらい、プチ・パリ気分を味わえるようになった。しかし、ブルコヴォ空港はやがて手狭になり、大規模な拡張工事を終え、2014年に残念ながらサテライトビルと共にトンネルもなくなってしまった。ああ、レニングラードとパリはトンネルでつながっていたのに・・・。

* 下記写真はLive Journal 2014年3月19日付「Сателлиты в Пулково...」 「Flickr Taigatrommelchan201808024」より引用



国際放送史研究の戯言No37

ダーリ

島田 顕

ウラジーミル・イヴァノヴィッチ・ダーリは、ロシア語をかじったことのある人ならば知らない人はいないほどの有名人。ロシア語の大辞典『ロシア語詳解辞典』を編んだ編纂者だ。辞典作りの小説が近年話題となったことはいまでもないが、辞典が長年の労苦の末に作られるということはロシアも同じである。

ダーリは、帝政ロシア海軍の幼年学校を卒業後、海軍少尉となって初めての赴任地であるニコラエフに赴く旅の途中、御者が発した言葉によって、母国語であるロシア語を全く知らなかったことを自覚する。これがダーリの言葉集めのきっかけとなった。

ダーリは故郷のルガンに生まれ、海軍幼年学校、後に内務大臣囑託官吏兼御料地大臣書記官を務めたサンクト・ペテルブルグ、軍人としての赴任地であるニコラエフや黒海沿岸の諸都市、バルト海の海軍基地であるクロンシュタット、医学生時代のデルプト（現在のエストニアのタルトゥ）、トルコ戦争やポーランド戦役の際に従軍医師として同行したシリストラヤ（現在のブルガリアのシリストラ）をはじめとする戦地、総督囑託官吏として勤務したオレンブルグ、帝国御料地管理局長として過ごしたニジニ・ノブゴロド、そして官吏退職後の終焉の地であるモスクワと、様々な土地を訪れた。各地を訪れたことがその後の辞典作りという大仕事に生かされる。人生という長い旅路の後によや



く作られたのがダーリの辞典なのだ。

ダーリは辞典編纂者として知られているが、それ以外にも様々な経歴を持っている。方言学者、民族誌学者、海軍軍人、医師、官吏、小説家、民族学者でもあった。

ロシアを代表とする作家、プーシキン、ジュコフスキー、クリロフ、ゴーゴリらとも親交があった。特にプーシキンとダーリは共通点を持っていた。それは民衆に向き合うということだった。そしてプーシキンを最後にみとった医者がダーリだった。

ダーリは生涯を通じて言葉の収集活動を行った。民謡、おとぎ話、大衆版画なども集めていた。ダーリという言葉集めの方法は、手帳を常に肌身はなさず持ち歩いて、耳にした言葉、聞いたことのない言葉を書き留めること。最初は何気なくメモに書き留めていたにすぎなかったが、やがて言葉集めが自分の使命であることを自覚するようになる。生きた言葉は、民衆の中から生まれる。だからこそダーリは、民衆の生活に近づき、民衆の心によりそい、ありありとした民衆の生活を見る。それを再現したものがダーリの辞典だった。

ダーリは行動の人でもあった。虐げられた民衆をすくおうと尽力する。しかし辞典以外のダーリの行いは実らなかった。民衆のためのダーリの進言は無視され、握りつぶされたからだ。

言葉に対してこれほどまでに命を捧げた人物はダーリ以外にはいないだろう。生きた言葉を大切に。言葉と向き合うがゆえに民衆とともに生きた。それがダーリだった。